# 廟底溝文化成立試論

久保田　慎　二

## 1. はじめに

本論の目的は、廟底溝文化が、半坡文化のみから直接的に発展したのではなく、棗園文化をはじめとする他の文化を取り入れる形で成立したことを主張する点にある。

中国新石器時代の黄河流域における土器編年研究は、近年における大量の発掘報告により、ほぼその枠組みを確定した。中でも、新石器時代中期に当たる仰韶文化[(1)]の研究は、突出した研究の蓄積がある。つまり、仰韶文化の編年研究は、中国考古学の中で、最もゆるぎない基礎をもつ研究領域であるといえよう。しかし、研究の蓄積があるからこその弊害もある。歴史認識の固定化は、しばしば新出資料の増加等による新たな解釈の導入を遅滞させる。仰韶文化に関する編年研究の問題は、まさにこの点にある。

現時点における仰韶文化の年代観は、半坡文化から廟底溝文化への変遷が通用している。この年代観は、90年近い研究の蓄積の上に形成されており、日本・中国問わず一般的であるといえよう。しかし、1990年以降山西省西南部を中心として、既存の枠組みに当てはまらない土器群が出土した。つまり、「棗園文化（そうえんぶんか）」と呼ばれる考古学文化である［山西省考古研究所2004］。棗園文化は、出土土器の形態から廟底溝文化とのつながりが指摘される文化である。しかし、すでに厚い研究の蓄積がある中国考古学界において、廟底溝文化は半坡文化から直接的に発展したという見解が、自明の理となっている。したがって、棗園文化と廟底溝文化の関係に関する問題は、既存の見解の前に、押さえ込まれているというのが現状であろう。

廟底溝文化は、黄河流域を中心として、広範に影響を及ぼした文化である。したがって、廟底溝文化の成立を問い直すことは、黄河中流域に限った歴史観や年代観の修正に留まらない。例えば、半坡文化の東方に対する文化動態や、廟底溝文化に特徴的な花弁文をもつ彩陶の拡散年代にも修正が必要となる。つまり、廟底溝文化の新たな理解は、非常に重要な意義があるといえよう。

また、それぞれの学説には、それを証明するに足る根拠が存在する。したがって、無条件に自らが支持する学説を主張し、相対する学説を批判するわけではない。ただ、半坡文化から廟底溝文化への直接的な発展を支持する見解は、いくらかの矛盾を孕んでいる。矛盾点が存在する限り、議論を深化するべきであり、より蓋然性の高い結論を導くためにも、本論で筆者が一般的な見解と別の

角度から意見を主張する意義があると考える。

以上のような立場から、主に土器を研究対象としながら論を進める。土器の形態、文様、分布範囲から、廟底溝文化の成立について検討する。

## 2. 研究史と問題点

仰韶文化は、1921年河南省澠池県仰韶村におけるアンダーソンの発掘により出土した土器から命名された考古学文化である。その仰韶文化の大きな枠組みを決定付けたのは、1950年代における陝西省西安市半坡遺跡と河南省陝県廟底溝遺跡の発掘調査である。

両遺跡からは、異なる土器形態、彩陶文様をもつ土器群が確認された。そして、当時両遺跡から出土した土器群の前後関係を巡る議論が交わされた。つまり、半坡類型が早いか、廟底溝類型(2)が早いか、あるいは並存したかという議論である。各学説の代表的な支持者として、石邦興、安志敏、蘇秉琦の3人を挙げることができる。石は半坡遺跡の層位関係から半坡類型が先行するとした［石1959］。一方、安は廟底溝遺跡と三里橋遺跡の関係、土器形態や彩陶文様から、廟底溝類型が先行するとした［安1959］。また、両者と異なる見解として、蘇は一貫して両類型が並存したという見解を採り続けた［蘇1965］。

しかし、1962年の下孟村遺跡の報告を契機として、廟底溝類型が半坡類型の上にのる層位関係が陸続と報告され［陝西省社会科学院考古研究所涇水隊1962］、相対的に半坡類型が廟底溝類型に先行するという見解が一般化した。その後、厳文明は廟底溝文化が半坡文化から直接的に成立したとし、両文化に継承関係を認めた［厳1980］。この厳の見解を指標として、廟底溝文化が半坡文化を淵源とする現在の見解が定説化したことは間違いない。

しかし、1990年代以降、山西省翼城県棗園遺跡をはじめ、棗園文化と命名された新たな考古学文化が確認された。棗園文化の発見で最も重要なのは、廟底溝文化との直接的な関係が指摘された点である。その後、両文化の間隙を埋める北橄(ほくがん)遺跡や褚村(ちょそん)遺跡の資料が相次いで出土し、廟底溝文化が棗園遺跡との関係の中で形成されたとする見解が提出された。特に、宋建忠・薛新民は、北橄遺跡を詳細に分析することで、その第1･2期を廟底溝文化の形成期とし、廟底溝文化の淵源を棗園文化に求めた［宋・薛2002］。つまり、廟底溝文化は、半坡文化のみから直接的に発展した文化ではないことを主張した。

一連の廟底溝文化に関する新たな見解が示されたことで、再び半坡文化と廟底溝文化の関係に関する議論が俎上に載せられた。しかし、現在まで特に決定的な見解が示されないため、半坡文化を基礎として廟底溝文化が成立したという従来の見解が通用しているのが現状といえよう。

しかし、多数派を占める廟底溝文化が半坡文化を基礎として成立したとする見解には、幾つかの欠点が見られる。例えば、厳文明も認めるように、半坡文化と廟底溝文化の土器形態や彩陶文様には、一定の隔絶がある［厳1980］。厳はこの隔絶を中間資料の欠如と解釈したが、すでに1000を超

える仰韶文化の遺跡が確認されている現在でも、厳のいう中間資料に相当する例は確認されていない。さらに、厳は半坡文化を直接的に継承して廟底溝文化が成立したとする根拠に層位関係を挙げるが、層位の上下関係は、ある地点における時期的な前後関係は示すものの、その継承関係までは示さない。層位の上下で土器形態に連続性が認められれば、上下の層位に見られる土器群の継承関係の蓋然性は高いが、半坡文化と廟底溝文化に関しては土器形態にも一定の差異が見られる。つまり、層位関係に形態変化が連動しない状況では、半坡文化と廟底溝文化の間に継承関係を認められない。したがって、半坡文化と廟底溝文化の年代関係あるいは継承関係を、前者から後者へという道筋で、安易に考えることはできない。

一方、廟底溝文化の淵源が半坡文化ではないとする宋などの主張も、主に棗園文化と廟底溝文化を繋ぐ北橄遺跡の分析に終始し、半坡文化との比較や遺跡分布などの視点に欠けている。廟底溝文化は一貫して半坡文化から直接的に発展したと考えられてきたため、廟底溝文化に別系統の発展の道筋を見出すなら、半坡文化と廟底溝文化の間に明確な差異を指摘するべきである。また、遺跡分布は異なる文化の発展継承関係を検証するのに重要な視点であり、半坡文化、廟底溝文化、棗園文化の関係を捉えるのに最適な分析方法である。

本論では、以上の問題点を明確にした上で、論を進める。まず、現在の一般的な土器編年から年代観を整理し、その上で半坡文化と廟底溝文化の土器形態・文様を比較する。次に、棗園文化が分布する山西省西南部の土器編年から年代観を整理し、土器形態を中心に棗園文化と廟底溝文化の関係を検討する。最後に、それぞれの文化の分布域を整理することで、文化間関係を考える。

## 3. 新石器時代中期における黄河東流地域[3] の土器編年

### (1) 既存編年の検討

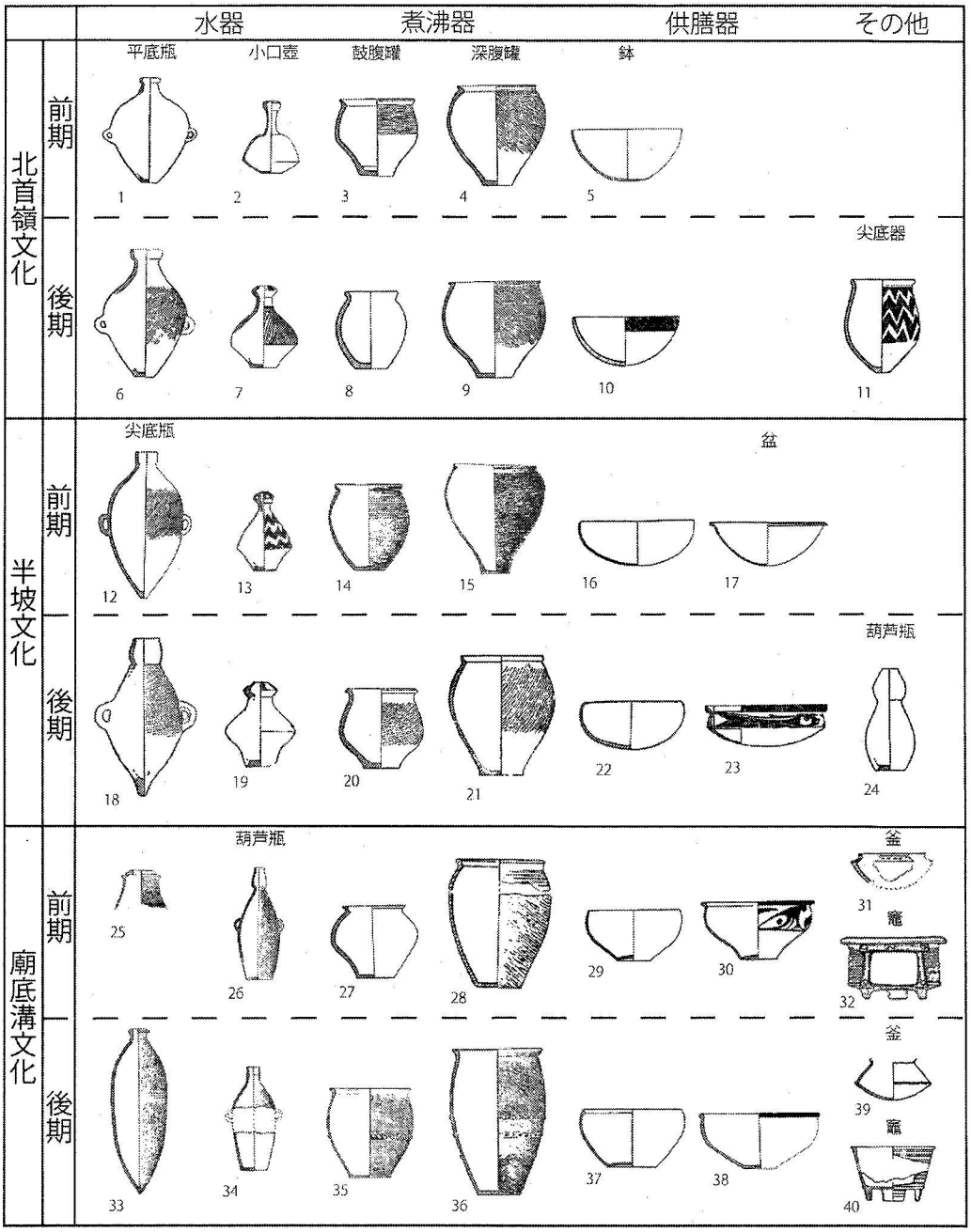
90年以上に渡る研究を経て、華北地域の代表として捉えられる河南省西部・山西省西南部・陝西省中東部を中心とした新石器時代の土器編年は、ほぼ確立した。文化変遷は、大まかに老官台文化、北首嶺文化、半坡文化、廟底溝文化、西王村Ⅲ期文化の順に分けられる。本論の研究目的は主に廟底溝文化の成立にあるので、まず北首嶺文化から廟底溝文化までの既存編年を確認する（図1）。北首嶺文化は、陝西省北首嶺遺跡中期を典型とする文化であり、大きく2期に区分できる。以前は半坡文化の一部として捉えられたが［趙1992］、現在では老官台文化から半坡文化への過渡期として、独立した文化と捉えられることが一般的である。典型土器は平底瓶で、前期段階では口縁部が半円状を呈し、肩部から胴部にかけて外に張り出す。底部は尖底状を呈すが小さな平底を形成し、胴部中央両側に把手をつける。鼓腹罐、深腹罐は最大径が胴部中央よりやや上にあり、縄文あるいは弦文を施す。鉢は主に丸底で、無文のものが大部分である。後期になると、平底瓶の口縁部が直立し、肩部の張りが緩くなる。加えて、胴部上半に縄文が施される。罐類や鉢をはじめとした他の器種には、形態的に大きな変化は見られない。また、彩陶は北首嶺文化を通して口縁部に彩帯をもつ鉢以

外に見られない。

半坡文化は、上述した陝西省西安市半坡遺跡を典型とする文化で、大きく2期に区分できる。一部の研究者は、半坡文化後期を史家類型として独立させるが［王小慶1993］、文化区分の重要な指標である器種組成に大きな変化が見られないため、ここでは半坡文化後期に含める。半坡文化の典型土器には、尖底瓶、深腹罐、鉢、盆がある。前期の尖底瓶は、北首嶺文化後期の平底瓶と同様に口縁部が直立し、胴部両側に把手をつけるが、底部は尖底化する。鼓腹罐や深腹罐は、最大径が胴部上半にあり、北首嶺文化と同じく縄文あるいは弦文を施す。また、供膳器には鉢の他に盆が出現する。鉢や盆は、大多数が丸底を呈す。後期になると、尖底瓶の口縁部がすぼまり、最大径も胴部下半に移る。尖底部は角度が小さくなり、先端が中実になる。罐類は、深腹罐の胴部の張りが緩くなり、口縁部径と底部径の差が小さくなる。供膳器には、前期と同様、丸底の鉢や盆が見られる。また、葫芦瓶と呼ばれる内湾する口縁部をもつ器種もよく見られる。この他、半坡文化の重要な特徴として、具象的な文様をもつ彩陶の出現が挙げられる。文様には魚文、人面魚文、鹿文、蛙文、変体魚文などがある（図3）。北首嶺文化では口縁に彩帯を施す土器しか見られないため、具象的な文様をもつ彩陶は半坡文化の最大の特徴といえる。土器の器種組成、形態などの点から見れば、半坡文化が北首嶺文化から連続的に発展したことは明確である。

廟底溝文化は、河南省陝県廟底溝遺跡を典型とする遺跡で2期に区分できる。典型土器には、尖底瓶、葫芦瓶、鼓腹罐、深腹罐、鉢、盆、陶灶、釜が挙げられる。前期の尖底瓶は、口縁部が内側にすぼまり、頸部と口縁部の間に突出部が見られる。葫芦瓶は、口縁部が半坡文化の尖底瓶に類似した形態を呈し、底部は平底である。鼓腹罐、深腹罐は半坡文化に類似するが、深腹罐の円筒化がより顕著になる。器表には、縄文を施す。鉢は、口縁部がやや内湾し、平底が大多数を占める。盆は、胴部中央で湾曲する例が多く、底部は平底が一般である。釜、陶灶は新出の器種であり、セットで煮沸器として使用された可能性がある。後期になると、尖底瓶の口縁部のすぼまりが弱くなり、内面の立ち上がりも垂直に近くなる。胴部は、半坡文化の尖底瓶と比較するとかなり長くなる。葫芦瓶は、口縁部の膨らみが前期よりも小さくなり、頸部から口縁部がスムーズに立ち上がる。鼓腹罐と深腹罐は、胴部の張りが弱くなる。また、胴部に粘土紐を巻き、廟底溝二期文化に見られる円筒罐の形態に近くなる。鉢や盆は、形態に大きな変化は見られず、底部はやはり平底である。釜や陶灶も引き続き出土する。この他、廟底溝文化の重要な特徴として、彩陶が挙げられる。廟底溝文化の彩陶には、抽象的な文様が多く、曲線を多用して描かれた花弁文などが主要である。半坡文化と同じような具象的な文様は、鳥文など一部しか見られない。

以上見たように、現在通用する新石器時代中期の編年は、土器形態の差異を主な指標として3期に分けられる。3期に共通する典型土器には、鼓腹罐、深腹罐、鉢があり、平底瓶と尖底瓶にも器種間に明確な継承関係が認められる。つまり、3期は近接した器種組成を持ち、一定の繋がりをもって成立した土器文化であるといえる。一方、半坡文化の盆や廟底溝文化の釜、陶灶など、各文化で新




北首嶺遺跡：1・3・4・6・7・9・18・23　福臨堡遺跡：2・5・25・28・33~37・39・40　龍崗寺遺跡：8・10・11

半坡遺跡：12~17　姜寨遺跡：19~21・24　史家遺跡：22　泉護村遺跡：26・27・29・38

王家嘴遺跡：30　南城子遺跡：31・32　　（縮尺不同）

図1　新石器時代中期における黄河東流地域の既存土器編年

出の器種も見られる。これら新出土器は、共通性の中に見られる独自性として、土器形態とともに各文化を独立させる重要な要素である。

### (2) 半坡文化と廟底溝文化の比較

半坡文化と廟底溝文化は、年代・文化内容ともに関連した2つの文化として捉えられる。器種組成の類似や層位関係は、両文化の関係性を示す根拠として常に挙げられる。しかし、1980年段階で厳文明が指摘するように、細部に繋がりが認められない属性が存在することも確かである。

半坡文化と廟底溝文化に共通する器種として、尖底瓶、葫芦瓶、鼓腹罐、深腹罐、鉢、盆が挙げられる。葫芦瓶あるいは鼓腹罐、深腹罐は形態変化の方向が明確で、半坡文化と廟底溝文化の間で大きな矛盾はない。つまり、半坡文化から廟底溝文化へという時間的変化は否定できない。しかし、尖底瓶や鉢・盆類の形態変化には一部に矛盾が見られる。

尖底瓶の形態的特徴は、口縁部、胴部、底部の形態に集約される。半坡文化の口縁部形態は、前期の直立する形から後期の次第にすぼまる形に変化する。大きさも次第に大きくなる。一方、廟底溝文化前期の口縁部は、つぶれたような形で極端にすぼまる。また、口縁部と頸部の間に突出がある。大きさも、全体から見ると非常に小さい。胴部形態は、半坡文化後期では最大径が胴部下半にあり、胴部の占める割合も小さい。一方、廟底溝文化では最大径が胴部中央にあり、胴部の占める割合が大きい。底部形態はともに尖底であるが、半坡文化では底部の角度が小さく先端が中実であるのに対し、廟底溝文化では角度がやや大きく先端まで中空である。

鉢や盆は、口縁部がやや内湾あるいは外反する例が見られる点で共通する。しかし、底部形態は異なる。半坡文化の鉢や盆は、大部分が丸底を呈する。半坡文化後期に属する姜寨遺跡第2期では、鉢と盆を合わせて49点が報告されているが、その内の約76%に当たる37点が丸底を呈し、平底は約24%に当たる12点しか見られない。一方、廟底溝文化の鉢や盆は、平底が多い。廟底溝文化前期に当たる泉護村遺跡第1期Ⅰ段では、底部形態が判明する鉢と盆が合計11点報告されている。その内丸底を呈する例は1点のみで、残りの10点はすべて平底である。つまり、半坡文化は丸底が主であるが、廟底溝文化は平底が大多数であることが分かる。

以上より、尖底瓶、鉢、盆には、半坡文化と廟底溝文化の間に大きな形態的差異がある。この差異が表す可能性として、以下の3点を挙げる。一つは、厳文明が言うように半坡文化と廟底溝文化の間に、間隙を埋めるような未確認の文化が存在するという見方である。二つは、両文化の差異は形態変化の結果、形成されたもので、半坡文化と廟底溝文化の文化内容に連続性を認める見方である。三つは、両文化の差異が文化起源の違いに由来するとし、半坡文化と廟底溝文化の文化内容に一定の非連続性を認める見方である。1点目は、仰韶文化の遺跡が1000件を超えてもなお半坡文化と廟底溝文化を繋ぐ中間資料が確認されないため、可能性は否定するべきである。2点目は、特に尖底瓶の形態変化の方向と廟底溝文化に見られる尖底瓶の形態が一致しないため、やはり完全に肯定

できない。したがって、消去法的に考えると、3点目の文化系統を異にする可能性が最も妥当といえよう。

3点目を支持する資料として、山西省芮城県東荘村遺跡のH117が挙げられる。H117からは、2点の尖底瓶の口縁部が出土した（図2）。1点は半坡文化型、もう1点は廟底溝文化型の口縁部を呈す。一遺構からの出土が同時性を示すという前提では、半坡文化系の尖底瓶と廟底溝文化系の尖底瓶が、並存したと理解できる。この並存を半坡文化から廟底溝文化が出現する過渡期であると主張する研究者もいる［趙1992］。しかし、ある文化から別の文化が出現する過渡期ならば、2つの型式が並存するのではなく、中間的な形態を呈するべきである。したがって、むしろ別々の文化系統の中で成立した型式だからこそ、並存する現象が形成される。すると、やはり半坡文化と廟底溝文化は別系統の要素を含むと考えられよう。

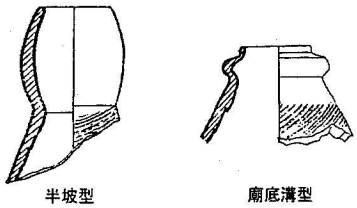
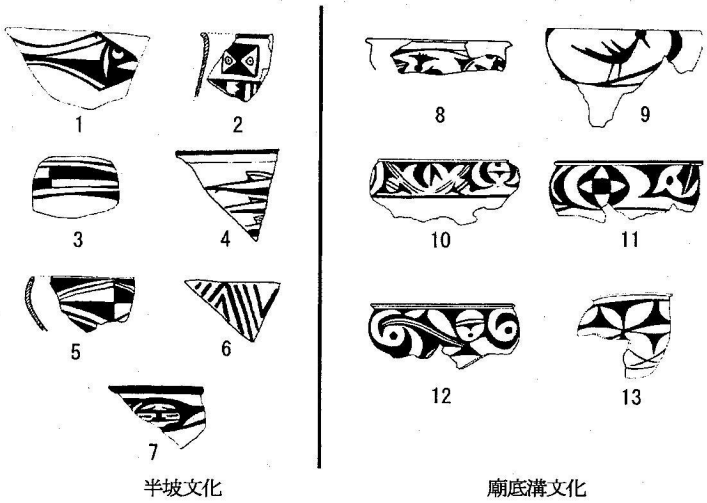



図2　東荘村遺跡H17出土尖底瓶




1～7：半坡遺跡　8～13：柳子鎮遺跡

図3　半坡文化・廟底溝文化の彩陶文様の比較

次に、彩陶文様を見る（図3）。半坡文化の彩陶文様は、魚文、人面魚文、鹿文など具象的な文様が主である。後期になると変体魚文などのやや抽象的な文様が増加するが、基本的に直線的な文様が大多数である。一方、廟底溝文化の彩陶文様は、花弁文をはじめとする抽象的な文様が主である。また、花弁文などの文様は曲線が主な構成要素であり、この点は半坡文化と異なる。具象的な文様は、鳥文など一部しか見られない。つまり、具象的・直線的な半坡文化の文様と抽象的・曲線的な廟底溝文化の文様の間には、特徴の大きな差異がある。この差異を無視して前者から後者に変遷したとは考えられない。やはり、彩陶文様についても両文化が異系統の要素を含むと考えるのが妥当である。

以上のように、一部の土器の形態的特徴と彩陶文様について、半坡文化と廟底溝文化の間で一定の差異が見られる。これらの差異は、時間軸の違いではなく、それぞれが別系統の起源を持つこと

に由来する。ただ、鼓腹罐や深腹罐のように連続的な変化を示す器種も見られる。異なる要素を備えつつ連続的な発展を示す土器が存在する状況は、廟底溝文化が半坡文化と関係をもちながら成立しつつも、他文化の影響あるいは自発的な変化を内包することを示す。つまり、廟底溝文化の成立は、半坡文化のみの単系的な発展ではなく、多要素を取り込む多系的な発展であったと推測できる。

## 4. 廟底溝文化と棗園文化の関係

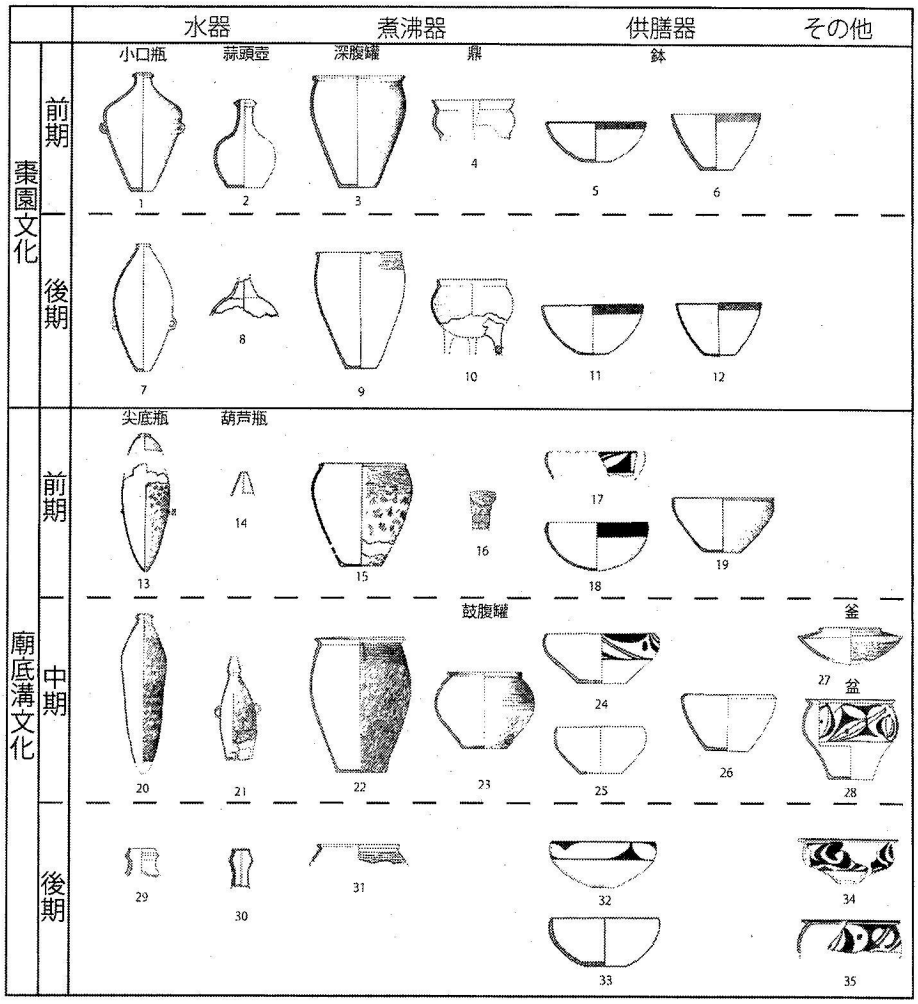
### (1) 山西省西南部における土器編年の検討

1990年代以降、山西省西南部では、仰韶文化に先行する棗園文化の遺存が報告されている。特に重要なのは、棗園文化が廟底溝文化と直接的な関係をもつと指摘される点である。そこで、山西省西南部の土器編年を見ることで、改めて棗園文化と廟底溝文化の関係を検討する。

現在、山西省西南部の新石器時代中期は、大きく棗園文化と廟底溝文化の2期に分けられる（図4）。一般に、廟底溝文化に先行して半坡文化が設定されるが、山西省西南部では半坡文化の遺物がほとんど確認されていない。

棗園文化は、前後2期に区分される。典型土器として、小口瓶、蒜頭壺、深腹罐、鼎、鉢が挙げられる。前期の遺物は、棗園遺跡で主に確認されている。小口瓶は、口縁部が「く」の字状を呈し、肩部がやや張る。また、胴部両側に把手をつける。蒜頭壺は、口縁部を厚くつくり、頸部が長く、胴部は丸く弧を描く。深腹罐は、最大径が胴部上半にあり、頸部から肩部の間に弦文を施す。鼎は、丸底の罐状を呈す。完形の出土はないが、錐状の三足部が出土している。鉢は、口縁部に紅色の彩帯を施し、底部は平底が多い。後期に属する遺跡には、垣曲商城東関遺跡、褚村遺跡などがある。小口瓶は肩部の張りが弱くなり、胴部が緩やかな弧状を呈す。また、底部がやや小さくなる。蒜頭壺は完形の出土がないが、頸部と胴部の間に段差が見られる。深腹罐は、口縁部の幅がやや小さくなるが、大きな変化はない。鼎は、口縁部の幅がやや小さくなり、胴部の深さが増す。鉢は、胴部の深さがやや増すが、大きな変化はない。

廟底溝文化は、3期に区分できる。前期は北橄遺跡以外で報告されておらず、廟底溝文化が山西省西南部で成立したことを示す重要な根拠となっている。廟底溝文化の典型土器には、尖底瓶、葫芦瓶、深腹罐、鼓腹罐、鉢、盆、釜、陶灶がある。前期の尖底瓶は、口縁部が「く」の字状を呈し、ややすぼまる。また、口縁部の器表には段がつくられる。胴部は緩やかな弧を描き、両側に把手をつける。底部は尖底である。葫芦瓶は、口縁部のみの出土であるが、口縁部がかなりすぼまる形態を呈す。深腹罐は、棗園文化と類似するが、胴部上半がやや内湾する。鼓腹罐は、胴部が弧状を呈し、最大径が胴部中央にある。胴部上半には、縄文を施す。煮沸器として、深腹罐と鼓腹罐以外に鼎の三足部が出土している。鉢は丸底と平底がある。丸底の鉢は、口縁部に彩帯を施す例が多い。平底の鉢は、胴部が底部から斜めに立ち上がり、口縁部附近で垂直に曲がる。前期で重要な点は、花弁文などの彩陶文様が出現する点である。棗園文化段階では彩帯しか確認されないため、一定の




秦園遺跡：1~6　垣曲古城東関遺跡：7~12　北橄遺跡：13~19　西陰村遺跡：20~28

耿壁遺跡：29・31~35　喬山底遺跡：30

(縮尺不同)

図4　山西省西南部の土器編年

規格性を有した彩陶文様の出現は、廟底溝文化の重要な特徴といえよう。

中期は、西陰村遺跡、光村遺跡第1期などが報告されている。尖底瓶は、口縁部の湾曲が強くなり、外面に明確な段差がつくられる。胴部は最大径が肩部附近に上がり、全体的に細長くなる。底部は、前期と同様に尖底を呈す。葫芦瓶は、口縁部がすぼまり、頸部との間に明確な段差がある。最大径は胴部中央にあり、把手をつける。深腹罐は、胴部の張りがやや緩くなり、頸部附近に弦文を施す。鼓腹罐は、胴部の張りが強く、最大径が中央にある。胴部上半には、弦文を施す。鉢は大

多数が平底を呈し、口縁部が内湾する。一部の鉢の上半には、彩文が施される。盆は、胴部中央で湾曲し、湾曲部から頸部に彩文が施される。釜は、口縁部が垂直に立ち上がり、丸底を呈す。中期の土器は、形態的に見ても前期から継続的に発展したことが伺える。

後期は、喬山底遺跡西王村上層期、耿壁遺跡などが報告されているが、遺物の出土は少ない。尖底瓶は、口縁部の湾曲がやや弱くなり、上方に立ち上がる。胴部以下は不明である。葫芦瓶も頸部より上の出土のみだが、口縁部はすぼまり、頸部と口縁部の間に見られた段差が不明確になる。深腹罐も完形の報告がないが、中期と同様、頸部附近に弦文を施す。鉢は、口縁部が若干内湾し、口縁部に彩文を施す例と施さない例がある。盆は、中期と同様に、胴部中央で湾曲し、湾曲部から頸部に彩文を施す。

山西省西南部と既存の黄河東流地域における廟底溝文化の対応関係は、土器形態から判断すると、山西省西南部の前期は黄河東流地域では確認されておらず、山西省西南部の中期が黄河東流地域の廟底溝文化前期、後期が黄河東流地域の廟底溝文化後期に対応する。

以上が山西省西南部における新石器時代中期の土器編年である。棗園文化期は、前・後期ともに器種組成に変化はなく、形態にも連続性が見られる。廟底溝文化では、新たに尖底瓶、葫芦瓶、釜などが出現する。その他、花弁文などの彩陶の出現も、廟底溝文化の重要な特徴である。廟底溝文化もまた、3期を通じて器種組成が共通し、形態にも大きな矛盾はない。つまり、廟底溝文化の3期は連続的に発展した一文化であると確認できる。

### (2) 棗園文化と廟底溝文化の比較

棗園文化と廟底溝文化は、土器の器種組成と形態から区分できる2つの異なる文化である。山西省西南部における棗園文化独自の器種には、小口瓶、蒜頭壺、鼎、口縁部に薄い紅色の彩帯を施す鉢がある。だが、黄河流域という大きな視点で見れば、これらの土器は陝西省の北首嶺文化や河南省の下王崗一期文化との共通性が見られ、周辺地域と一定の関係をもったことが分かる［孫1997］。一方、廟底溝文化では尖底瓶、葫芦瓶、丸底の鉢、胴部が湾曲する鉢、釜などが新たに出現する。特に、葫芦瓶や丸底の鉢は、陝西省の半坡文化で見られ、西方からの影響が伺える。また、釜は河南省以東の王湾一期文化などに見られる器種であり、器種は絞られるが東方との関係も指摘できる。つまり、廟底溝文化の成立には、既存の見解のように半坡文化の影響もあるが、加えて河南省以東の影響も受容したことが分かる。

では、廟底溝文化の成立にあたり、在地の棗園文化との関係はどうであったのか。棗園文化と廟底溝文化に共通する器種は、深腹罐と鉢である。また、棗園文化の小口瓶と廟底溝文化の尖底瓶も、前者から後者への連続的な変化が確認できる。廟底溝文化前期の深腹罐は、棗園文化の例と形態や文様に連続性が見られ、棗園文化と廟底溝文化の継承関係を示す。半坡文化にも深腹罐は見られるが、胴部上半の張りや下半の締りが廟底溝文化の例とやや異なり、別の発展系統を辿った可能性が

ある。鉢は、廟底溝文化前期に半坡文化の影響が想定できる丸底の例もあるが、多くは平底を呈する。棗園文化の鉢は、後期の垣曲古城東関遺跡第一期で報告された40点の内、完全な丸底と判断できるのはわずか5点で、大多数が平底を呈する。したがって、廟底溝文化の鉢は、棗園文化を継承したと考えられる。尖底瓶は、廟底溝文化前期の「く」の字状を呈する口縁部の形態が、棗園文化に見られる小口瓶の口縁部と類似する。また、胴部形態にも連続性が見られ、棗園文化前期の肩部が張る例から後期の緩やかな弧状に変化し、さらに緩やかな弧を描く廟底溝文化前期に至る。底部変化もスムーズで、棗園文化後期に小口瓶の底部が小さくなり、廟底溝文化前期の尖底に繋がる。つまり、尖底瓶も棗園文化から廟底溝文化への連続的発展が確認できる。特に口縁部や胴部は、半坡文化から廟底溝文化へという視点では形態的に矛盾が存在したが、棗園文化の小口瓶により、廟底溝文化の尖底瓶の成立に明確な起源を与えられる。

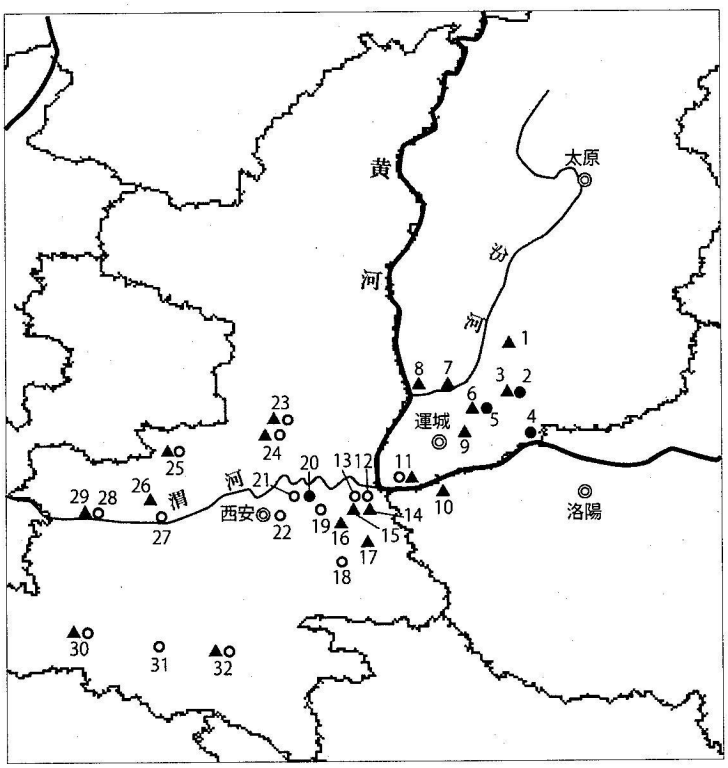
ただ、廟底溝文化の彩陶は、曲線が主な構成要素だが、棗園文化の彩陶は口縁部に彩帯を施すのみであり、両文化を単純に結びつけられない。しかし、半坡文化の彩陶文様が、北首嶺文化の彩帯から発展したとすれば、廟底溝文化の彩陶文様の起源が棗園文化の彩帯にあっても不思議ではない。山西省西南部における廟底溝文化の彩陶は、前期にすでに出土がある。廟底溝文化前期は、尖底瓶などの土器形態から見れば、棗園文化後期から連続的に成立している。つまり、時間的にも棗園文化の彩帯から廟底溝文化の彩陶文様は連続する。したがって、廟底溝文化の彩陶の起源を棗園文化の彩帯に求めることが自然である。もし、廟底溝文化の彩陶の出現に半坡文化の直接的影響があれば、具象的な文様や直線的な文様の彩陶が出土するべきだが、そのような報告は見られない。ただ、廟底溝文化の彩陶文様の構成に、明確な起源が見つからないことは確かである。この点を考慮すれば、確実に言えるのは、廟底溝文化の彩陶文様の起源が棗園文化の彩帯にある可能性が高いという程度までである。

以上のように、棗園文化と廟底溝文化は、それぞれを定義付ける特徴があるとともに、相互に共通点を見出せる。特に廟底溝文化では、半坡文化と関連する要素が多く見られるほか、河南省以東の影響もいくらか含まれる。ただ、ミクロな視点で見れば、少なからず棗園文化に起源が辿れる要素も存在する。また、棗園文化に起源が辿れる要素は、黄河東流地域の編年上で半坡文化と廟底溝文化の間に見られた土器形態・文様の矛盾点を、スムーズに補完する。つまり、廟底溝文化の成立は、半坡文化だけではなく、棗園文化も一定の役割を果たしたのではなかろうか。

## 5. 各文化に属する遺跡の分布状況

一つの文化を遺跡の分布密度から中心と周辺に分けると、その文化を純粋な基礎として出現する文化は中心から成立する。つまり、分布密度が濃い中心であれば共通性が強い典型的な内容を示すが、周辺では隣接する他文化の要素が混在する可能性が高いからである。以上の前提より、発掘調査を経た主要な遺跡の分布から、半坡文化、棗園文化、廟底溝文化の広がりを見る（図5）。

半坡文化は主に陝西省を中心として分布する。特に、典型的で豊富な内容を示す遺跡に、北首嶺、元君廟、姜寨、半坡、横陣、史家、龍崗寺、下孟村、大地湾、東荘村遺跡などがある。これらの遺跡は、廟底溝文化との関係を考える上で重要な半坡文化後期の遺存も含む。遺跡の大部分は、渭河流域に位置する華県、西安市、宝鶏市に分布する。陝西省以外では、東荘村遺跡が山西省芮城県に位置する。その他、河南省洛陽市に位置する王湾遺跡からも半坡文化に属する尖底瓶などが出土したが、報告数は少なく、半坡文化に属さない土器の出土も多い。さらに、東荘村遺跡や王湾遺跡に見られる半坡文化の土器は、半坡文化後期の形態を呈す。つまり、半坡文化が後期段階に陝西省以東へ分布を広げたことが伺われ、これらの地域は半坡文化の周辺に位置付けられる。以上より、半




1：耿壁遺跡　2：棗園遺跡　3：北橄遺跡　4：垣曲古城東関遺跡　5：褚村遺跡　6：喬山底遺跡　7：光村遺跡　8：固鎮遺跡　9：西陰村遺跡　10：廟底溝遺跡　11：東荘村遺跡　12：横陣遺跡　13：柳子鎮遺跡　14：泉護村遺跡　15：元君廟遺跡　16：北劉遺跡　17：焦村遺跡　18：紫荊遺跡　19：史家遺跡　20：零口遺跡　21：姜寨遺跡　22：半坡遺跡　23：李家溝遺跡　24：呂家崖遺跡　25：下孟村遺跡　26：王家咀遺跡　27：案板遺跡　28：北首嶺遺跡　29：福臨堡遺跡　30：龍崗寺遺跡　31：何家湾遺跡　32：玩家壩遺跡

図5　各文化の分布状況

坡文化は陝西省の渭河流域を中心として、周辺の山西省西南部や河南省にも拡散したことが分かる。

棗園文化は、4遺跡のみが報告されている。最近出版された『中国文物地図集』の山西分冊では、「仰韶文化早期」という枠組みで多数の遺跡が報告された。しかし、「仰韶文化早期」の示す時期が、棗園文化、半坡文化後期あるいは廟底溝文化前期なのか、明確にされていない。棗園文化で正式に報告された遺跡には、棗園遺跡、褚村遺跡、垣曲商城東関遺跡、零口遺跡がある。それぞれ棗園遺跡が前期、その他の3遺跡が後期に属する。零口遺跡が陝西省東部の臨潼県に位置する以外、すべて山西省南部に位置する。したがって、棗園文化の分布は、前・後期を通じて、山西省西南部を中心とした地域であると分かる。

廟底溝文化に属する遺跡は、すでに数百の報告がある。その土器の分布範囲は、西は甘粛省、北は内蒙古自治区、東は河南省と広範に渡る。ただ、山西省西南部の廟底溝文化前期に相当する遺跡は北橄遺跡以外で確認されず、黄河東流地域の廟底溝文化はすべてが山西省廟底溝文化中期以降に相当する。したがって、廟底溝文化出現の中心は山西省西南部に求められる。また、山西省北部・内蒙古自治区や河南省以東の廟底溝文化の土器を黄河東流地域と比べると、器種組成あるいは形態に差異が見られ、大部分は廟底溝文化の範疇に収まらない。したがって、廟底溝文化は山西省西南部を中心とする地域で出現し、その後周辺地域に拡散したと考えられる。

以上の遺跡分布から文化間関係を考えると、廟底溝文化が半坡文化のみを直接的な基礎として成立したとするのは難しい。つまり、半坡文化が渭河流域を中心とするのに対し、廟底溝文化は山西省西南部を中心として成立する。一方、棗園文化は、廟底溝文化と同じく山西省西南部を中心とする。したがって、遺跡分布という観点から見れば、棗園文化は廟底溝文化との関係が深い。現在までに一般化した半坡文化を直接の基礎として廟底溝文化が成立した見方は、遺跡分布からは無批判に肯定できず、廟底溝文化の成立に棗園文化との関係も考慮すべきであると提示できる。

## 6. 廟底溝文化の成立過程

ここまで、土器形態、彩陶文様、遺跡分布から、廟底溝文化の成立を考えた。既存の編年を見る限り、半坡文化と廟底溝文化に見られる尖底瓶の口縁部形態、鉢の底部形態、彩陶文様には、一定の隔絶が見られる。したがって、廟底溝文化の成立に関して、半坡文化以外の要素を想定すべきである。そこで、山西省西南部で確認された棗園文化を見ると、廟底溝文化と半坡文化の間に見られた隔絶を埋める資料が出土している。棗園文化の小口瓶の口縁部形態や鉢の底部形態は、廟底溝文化に繋がる要素を有する。また、北橄遺跡の発見により、棗園文化から廟底溝文化への変遷も明確である。ただ、彩陶文様には、確実な継承関係が見られない。しかし、北首嶺文化の彩帯から半坡文化の彩陶文様が出現したことや時間の連続性を考慮すれば、棗園文化の彩帯から廟底溝文化の彩陶文様が出現した可能性が高い。これら土器の諸要素に加えて、遺跡分布も棗園文化と廟底溝文化の結びつきの強さを示す。つまり、廟底溝文化の成立には、棗園文化の一定の影響があったと考え

られる。

また、廟底溝文化以降に出土する釜や陶製の竈は、河南省以東に多く分布する土器である。したがって、廟底溝文化成立に際し、東方からの影響も受容したことが分かる。廟底溝文化に続く廟底溝二期文化では、さらに斝など河南省以東に起源をもつ土器が出現する。つまり、廟底溝文化の釜や陶製の竈は、後に続く東方からの影響の先駆けとして位置付けられる。

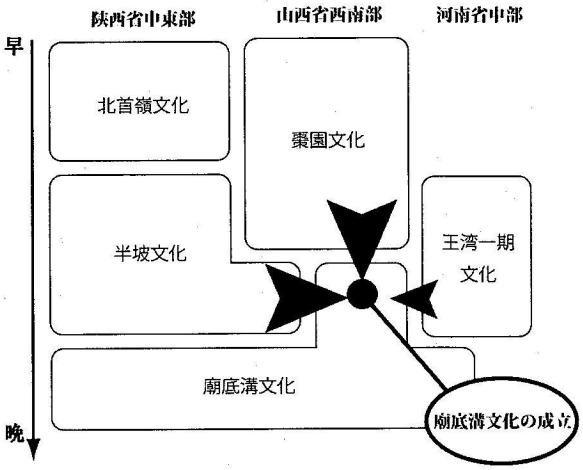



図6　廟底溝文化成立までの概念図

では、半坡文化と廟底溝文化の関係はどうであったのか。少なくとも、棗園文化を主とした一定の要素が廟底溝文化の中に確認できるので、既存の見解のように半坡文化のみを直接的な基礎として廟底溝文化が成立したとは考えられない。しかし、土器編年を見る限り、半坡文化と廟底溝文化の間には、一部に器種組成の類似や形態の連続性が見られる。また、彩陶文様も、彩帯ではなく文様を描く点で共通する。したがって、半坡文化も廟底溝文化の成立に影響したはずである。しかし、遺跡分布からは、半坡文化と廟底溝文化に直接的な繋がりが見出せない。ただ、陝西省臨潼県零口遺跡から、第7·8層に棗園文化、第5·6層に半坡文化という層位関係が確認されている。また、棗園文化の分布域に近い山西省東荘村遺跡や河南省王湾遺跡からも半坡文化の遺物が出土している。これらの半坡文化の土器は、半坡文化の比較的晩い段階の様相を示す。つまり、半坡文化は渭河以東に分布を広げる過程で黄河東流地域と接触し、廟底溝文化の成立に影響を与えたのであろう。

以上をまとめると、廟底溝文化の成立は、半坡文化のみを基礎とする単系的な構図ではなく、棗園文化や河南省以東の要素をも含む多系的な構図を描くことができる（図6）。既存の見解の重要な根拠である下層の半坡、上層の廟底溝という層位関係は、廟底溝文化が成立した後、周辺に拡散する過程で形成されたのだろう。廟底溝文化の最も早い段階の遺存が、山西省西南部の北橄遺跡でしか確認されていない以上、このように考えるべきである。

最後に各文化の相対年代について述べる。現在、各文化の相対年代を示す根拠は、以下の点に絞られる。

①半坡文化層が北首嶺文化層にのる（北首嶺遺跡など）。②棗園文化は土器形態から廟底溝文化よりも早い。③半坡文化層が棗園文化層にのる（零口遺跡）。④廟底溝文化層が半坡文化層にのる。⑤半坡文化と廟底溝文化が一部併行（東荘村遺跡）。

これに分布域を考慮すると、図6のように理解できる。まず、北首嶺文化の後に半坡文化、棗園

文化の後に廟底溝文化が位置付けられる。棗園文化と北首嶺文化の関係は不明だが、小口瓶などの土器形態から判断すると、東西に並存したと考えられる。また、山西省西南部で棗園文化に続いて廟底溝文化が出現するが、多くの遺跡で半坡文化の上にのる現象に加え、東荘村遺跡で半坡後期と廟底溝中期の尖底瓶が共伴するため、廟底溝文化は半坡文化と一定期間並存した後、周辺地域に拡散したと考えられる。問題なのは、山西省西南部で廟底溝文化がいつ頃出現したのかである。半坡文化後期と廟底溝文化中期の土器が共伴しているため半坡文化後期以前と考えられるが、廟底溝文化が半坡文化に先行する層位関係は報告されていないため、半坡文化より溯るとは考えにくい。また、棗園文化に廟底溝文化が連続するため、棗園文化も一部で半坡文化と並行することになる。しかし、現在までに棗園文化と半坡文化の遺物が共伴した例は報告されていない。したがって、棗園文化と半坡文化は年代的に一部併行してはいたが、相互が頻繁に交わることはなかったと理解できる。半坡文化と棗園文化が上下の層位関係で確認された零口遺跡は、半坡文化の東方への広がりに伴い、棗園文化後期の遺跡が廃棄された結果、形成されたのであろう。

以上が現状で明らかにできる、各文化間の相対年代である。ただ、山西廟底溝文化前期の遺跡が北橄遺跡以外に確認されていないため、廟底溝文化成立の詳細な時期は確定できない。以後の資料増加を期待したい。

なお、本研究は2007年度早稲田大学日本学術振興会特別研究員DC奨励研究費（課題番号AO7147800）ならびに平成19年度科学研究費補助金特別研究員奨励費（課題番号19・286）を受けて実施した研究成果の一部である。

謝辞　本論文を執筆するに当たり、早稲田大学文学学術院岡内三眞先生、同非常勤講師後藤健先生、早稲田大学考古学研究室の諸氏に多方面で御指導・御教示を頂いた。文末ですが、記して感謝いたします。

**註**

(1) 本論で言う仰韶文化は、旧来の概念同様、半坡文化、廟底溝文化、西王村Ⅲ期文化などを包括した概念として用いる。

(2) 半坡遺跡と廟底溝遺跡の発掘以降、仰韶文化を細分する概念として「類型」という用語が使用された。だが、現在では各類型の特殊性より、類型の上位概念である「文化」という用語が使用される。ここでは研究史を尊重し、類型という用語を使用した。

(3) 本論で言う黄河東流地域は、陝西省、山西省、河南省が境界を接する地域、つまり黄河が内蒙古自治区から南流し、東へ流れを変える地域を中心とした一帯を指す。この地域の編年は、華北地域の新石器時代中期を代表するものとして、一般に捉えられている。

**≪参考文献≫**

安志敏1959「試論黄河流域新石器時代文化」『考古』第10期
王月前2007「東関遺址仰韶早期遺存的相関問題」『中原文物』第2期
王小慶1993「論仰韶文化史家類型」『考古学報』第4期
王仁湘2003「半坡文化和廟底溝文化関係研究検視」『文物』第4期
許志勇2000「関於古城東関早期文化遺存的若干相関問題」『中国歴史博物館考古部記念文集』　科学出版社
厳文明1977「半坡仰韶文化的分期与類型問題」『考古』第3期
　　1980「論半坡類型和廟底溝類型」『考古与文物』創刊号
　　1989『仰韶文化研究』文物出版社
黄河水庫考古隊華縣隊1959「陝西華県柳子鎮考古発掘簡報」『考古』第2期
国家文物局1991『中国文物地図集　河南分冊』中国地図出版社
　　1995『中国文物地図集　陝西分冊』中国地図出版社
　　2006『中国文物地図集　山西分冊』上・中・下　中国地図出版社
山西省考古研究所1993「山西翼城北橄遺址発掘報告」『文物季刊』第4期
　　1993「山西侯馬邠村遺址試掘簡報」『文物季刊』第2期
　　1996「西陰村史前遺存第二次発掘」『三晋考古』第二輯
　　2004『翼城棗園』科学技術文献出版社
周春茂・閻毓民1997「零口文化的発現及其意義」『文博』第5期
西安半坡博物館・渭南県文化館1978陝西「渭南史家新石器時代遺址」『考古』第1期
西安半坡博物館・陝西省考古研究所・臨潼県博物館1988『姜寨』上・下　文物出版社
石興邦1959「黄河流域原始社会考古研究上的若干問題」『考古』第10期
陝西省考古研究所1990『龍崗寺』文物出版社
　　2004『臨潼零口村』三秦出版社
陝西省社会科学院考古研究所涇水隊1962「陝西邠県下孟村仰韶文化遺址続掘簡報」『考古』第6期
蘇秉琦1965「関於仰韶文化的若干問題」『考古学報』第1期
宋建忠・薛新民2002「北橄遺存分析―兼論廟底溝文化的淵源」『考古与文物』第5期
孫祖初1997「中原地区新石器時代中期向晩期的過渡」『華夏考古』第4期
　　1998「半坡文化再研究」『考古学報』第4期
中国科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館1963『西安半坡』文物出版社
中国社会科学院考古研究所1983『宝鶏北首嶺』文物出版社
中国歴史博物館考古部・山西省考古研究所ほか2001『垣曲古城東関』科学出版社
趙賓福1992「半坡文化研究」『華夏考古』第2期
張朋川2005『中国彩陶図譜』文物出版社
北京大学考古学系2003『華県泉護村』科学出版社
北京大学考古文博学院2002『洛陽王湾』北京大学出版社
北京大学歴史系考古教研室『元君廟仰韶墓地』文物出版社
宝鶏市考古工作隊・陝西省考古研究所宝鶏工作站1993『宝鶏福臨堡』文物出版社
楊亜長1998「試論“華渭文化区”」『考古与文物』第4期
なお、紙幅の関係上、一部発掘簡報は割愛した。ご容赦願いたい。